

— 1 —
次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ホーレン草のおひたし、焼海苔、納豆、沢庵、豆腐の味噌汁、等々、食べたいものを書いてみるとキリがないが、そういった昔からある日本のふつうの食事のあとは、やはり緑茶が飲みたくなる。それらを食べたあとの口に合うのである。

すべてがトロトロと脂っこいものでからめられた中華料理のあとにはウーロン茶やジャスミン茶がいいし、肉類がどしんと腹に入る洋風料理のあとは、コーヒーカー、あるいは強いウイスキーをストレートでぐいと飲んでみたくなる。それぞれの土地の飲み物は、長い歴史の中で、それぞれの土地の食べ物と調和するものが選ばれて出来上がっている。

ところが日本のお茶の場合、それがたんなる飲料を超えて、茶道という一つの道にまでなっているのだ。それが子供のころにはどうしても①不思議だつた。茶道の環境に育ったものならいざ知らず、近年のごくふつうの一般の家庭で、お茶といえばたんなる飲み物である。

たとえば酒というたんなる飲みものではない。酔うという特異な状態が生れる。だからその状態を究めようというのなら、動機としてわかるのである。しかしお茶という、たんなる飲み物を究めようというその動機は、考えたら不思議なものだ。

たとえば家を出て駅まで歩いて電車に乗る。歩くのは移動のための方便である。そのたんなる歩行を楽しむものに散歩というものがある。しかしそれを究めようとする歩道、もしくは歩行道なるものは、ない。

たんなる散歩は楽しいものだが、それは人間の頭の働きというものが、つい働きすぎて思想として固まろうとする傾向を、むしろときほぐすものである。たんなるお茶もそれと同じで、食事を終えて、満ち足りた疲労をときほぐすために、ゆっくりと、散歩のようなリズムでお茶を飲む。凝固剤ではなく、あくまで溶剤としての働きである。

それなのに、日本の歴史はそのたんなるお茶を究めていって茶道というものを創り上げている。ときほぐすはずのものがそこで凝結して固まりながら、一つの思想を生み出している。あり得ないことが起きているという感じである。お茶は散歩とは違うもの

になっていたのだ。(中略)

大人になって知ったことだが、茶道の世界のことは、もう少し柔らかに「茶の湯」という。その世界を創り上げたのは千利休一人ではない。たんなるお茶にはじめて(注1) 侘び茶という思想をまぜようとしたのが(注2) 珠光という人で、次に(注3) 紹鷗という人が受けついで、それを利休が完成させたのだといわれている。しかしその三者の中で日本国民の皆知っている名前はというと、圧倒的に千利休である。少しお茶の世界に深入りしたところで紹鷗や珠光の名を知るが、茶人といえはまず誰しもが千利休なのである。

もちろん大衆(注a) ニンシキがすべて正しいとは限らない。アメリカ大陸はコロンブスによって発見されたが、結果としては二番手に到着したアメリカの名を冠することになってしまった。本命のコロンブスは南米コロンビアにその名をわずかにとどめたにすぎない。パイオニアをさしおいて二番手が X 夫の利を得るといふのはよくあることである。

しかし茶の湯は発見でもあるが、作業を積み重ねた上の創造である。先人の時代からややもとはじまっていたものを、はっきり確立した人として千利休の名が焼きついているのだ。つまり先制打を放ち、それをバントで送った人はいらる。しかしそれをきちんと得点に結びつけるタイムリーを打った人、つまり勝利打点(バット)は利休なのだ。

チャンスに打順が回る、つまり時を得た好運ということもあるだろう。それを考えると、人の才能というのは必ず好運を選んで発芽してくる。②利休の才能というものは、その時代の運命、その流れによって利休に配分されたものである。逆にいうと、その時代の運命もまた人の才能の中の一部なのだ。(中略)

いうまでもなく、お茶というのは静かな芸術である。言葉で議論し、論理的な結論を得るといったものではないのだから、もともおしゃべりな世界ではないのである。それよりもお茶室で茶事(ちやじ)をおこないながら、その流れの中で、手が囁き(ささや)、物が呟く(つぶや)、それがそのまま話となるのであるから、日常生活に対比すれば口数の少ない、無口な世界だ。従って利休も無口であつたらうと想像するのは当然だけど、もう一つ、利休が茶によってあらわそうとするものが、無口を原理とするほかはなかったものだというこ

とがある。

そもそもお茶という芸術は言葉では説明できない。いや、そもそもいまは芸術という概念的な言葉があるから便利だけど、これは少なくとも明治以降のことであって、利休の時代には芸術なんて言葉はなかったのである。だけど人々は、いずれ芸術という言葉で集約されるはずの、しかしまだそのときはばらばらに散らばったままの^(b)マツタンの一つ一つを好み、愛でながら、それを選び分け、組み合わせ、磨き上げていった。人々はただお茶を飲み、飲みながらその味にこだわりの、その飲み方にこだわりの、お茶で人をもてなすようになり、そのもてなし方を究めながら、茶碗、釜、炭火、花、掛軸、お茶室、^(注4)露地、^(注5)飛石などなど、それらが複雑に響き合うところのものを創り上げていった。つまりお茶を点^たてて飲み、そのために料理を作って食べる、そのおこないから栄養やカロリーを除いてもなお残る価値、というものをふくらませていったのである。

話は違いますが気功術というものがある。病氣の人などに、気功師が自分の気というものを送り込んで、その人の元気を回復させる。気というのは見えないし計れないものだけれど、この宇宙に満ちているのだという。その気を自分の中に取り入れて、自由に出し入れできるように修業を重ねる。それが練達してくると、右手から入れて体の中を回して左手から出す。もちろん物体ではないので見ることも触ることもできないけれど、しかしその自分の力量によって出し入れできる気の塊というのが、修業するほどにだんだん大きくなってくるらしい。

私の会った人は、いま自分はやつとこのくらいの大きさの気を出し入れできるようになったといって、両手でスイカぐらいの大きさの玉を示した。もちろん見えない球だけど、その大きさの玉をなでる^(c)素振りをしている。物理的な形にはならないけれど、自分ではわかるのだという。

この話は面白かった。見えないものを見る形で説明しようとするから面白いのである。しかもその説明しようとする人に確信があるから面白いのである。たしかに自分が出し入れできるものがあって、それがいま形というスイカぐらいになっている。でもそれは形では見せられず、言葉にもならず、その見えない玉の大きさをなでてみせるしかない。

お茶というのも、そのようなものではないか。

つまり利休の時代の、芸術という言葉の確立していない未分化な^(注6)汎^{はん}芸術状態というものは、それを究めれば、先の気功師が示した見えないスイカ玉のようなものになるのである。その時代の茶人たちは互いに茶会を開いてもてなし、もてなされながら、その見えない玉を少しずつ大きくふくらましていったのである。それを右手から出し、茶碗に盛り、^(注7)茶筌^{ちやせん}でふくらませて差し出す。相手もそれを右手から体に入れて左手から出し、それを両手に包んで観賞する。その両手にお茶室の各所に^(d)潜^{ひそ}む茶気とでもいったものが吸い寄せられて、また散らばっていく。そうやって互いの気を感じながら、

「私のはもうこのくらいになりました」

「そうですか。私のはまだやつとこのくらいで」

などという具合に、それぞれスイカぐらいの玉や、ミカンぐらいの玉を空中に描いて、そういう見えないものを見せ合っていたというのがお茶の世界にはあったと思うのである。

千利休は、そのような無口な世界で能弁であったと思う。だからこそ人々の心に直かに焼きつき、また一方で⁽³⁾口達者な秀吉のコンプレックスを増大させた。この二人の、世にいう政治と芸術との対立、勝負というものは、手続きを全部どけてみると、まずそこそこにあつたのである。声を発して説き伏せるものと、無言で示すもの。一方は言葉の経済が支配し、他方はその経済をすり抜けていく。

(赤瀬川原平「千利休無言の前衛」による)

(注1) 佗び茶……ぜいたくさではなく質素で静かな境地を求める茶の道のあり方。

(注2) 珠光……村田珠光(一四三三―一五〇二)室町時代の茶人。

(注3) 紹鷗……武野紹鷗(一五〇二―一五五五)室町時代の商人、茶人。

(注4) 露地……茶室に付属した庭。

(注5) 飛石……日本庭園の通路にとびとびに置かれた平たい石。

(注6) 汎芸術状態……後世「芸術」として集約されるが、この時代にはまだ集約されていなかった様々なものが、複雑に響き合っていた状態。

(注7) 茶筌……お茶をたてるときに、かきまわして泡立てたり、練ったりするための竹製の道具。

問一 〓(a) 〓(d) のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二

X

 に入る漢字一字を答えなさい。

問三 ①「不思議だった」とあるが、筆者が「茶道」の確立を「不思議」に感じたのは、「お茶」がどのような性質を持つものだからか。本文の言葉を用いて説明しなさい。

問四 ②「利休の才能」とあるが、この部分で筆者は「利休」のどのような点に「才能」を見出しているのか。本文の言葉を用いて説明しなさい。

問五 ③「口達者な秀吉のコンプレックスを増大させた」について。「コンプレックス」とは「劣等感(自分が劣っているという感覚)」という意味の言葉である。それをふまえて、傍線部③の説明として、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 茶会におけるもてなし、もてなされの中で、目に見えず言葉にもできない気のようなものを大きくふくらませ、それを出し入れすることで人の心を動かすお茶の世界において、利休は才能を発揮した。逆に、秀吉は言葉とお金の力を用いて人

の心を動かす政治の世界において才能を発揮した。言葉とお金の力なくして人を動かせない秀吉は、お金を用いず、かつ無言で人の心をゆさぶる利休の存在に憧れを抱きながら、利休に自分は及ばないという思いを次第に強めていったということ。

イ 修業をする中で、見えない気のようなものを大きくふくらませていき、それを自由に出し入れすることで、言葉を用いずに相手を説得するお茶の世界において、利休は第一人者であった。逆に秀吉は、言葉を用いて相手を説き伏せる政治の世界における第一人者であった。言葉を尽くさなければ相手を支配できない秀吉からみて、利休の無言の説得力は、いかにも経済的で効率がよく、そのため秀吉は利休の方が自分よりも上だという感覚を強めていったということ。

ウ 形にも言葉にもならない、宇宙の気のようなものを修業の中でふくらませていって、その大きさによって相手を支配するお茶の世界において、利休は偉大な存在であった。対して秀吉も、言葉によって相手を支配する政治の世界においては偉大な存在であった。言葉巧みに相手を支配する秀吉の力は、なぜか利休に通用せず、利休は秀吉の力をすり抜けていくようなところがあったため、秀吉は自分が利休には到底及ばないという気持ちを強めていったということ。

エ 形では見せられず言葉でも示せない宇宙の気にも似たものを修業の中でふくらませていって、それを出し入れして相手とやりとりをする無言の世界で、利休は優れた力を発揮した。逆に、秀吉は言葉のやりとりの中で相手を説得する世界で優れた力を発揮した。利休の無言の力は、秀吉には持てないものであったと同時に、秀吉の言葉の力の通用しないものであったため、秀吉は利休よりも自分が劣っているという感覚を次第に強めていったということ。

オ 目には見えず存在しているのかどうかよく分からない宇宙の気のようなものを自分が出し入れできることを確信している人々の集うお茶の世界において、利休は人々の尊敬を集めていた。対して秀吉は、目に見える物質的なものが全てであるような政治の世界において、人々の尊敬を集めていた。秀吉にとつて目に見えないものを扱うと言われる利休は怪しい存在であったが、なぜか秀吉は得体の知れない利休よりも自分が劣っているという感覚を強めていったということ。

問六 次の(A)～(G)の人物の中から「千利休」の死後に活躍した人物を三人選び、その代表作を後の選択肢の中からそれぞれ選びなさい。

- | | | | |
|----------|----------|-----------|------------|
| (A) 兼好 | (B) 紫式部 | (C) 滝沢馬琴 | (D) 近松門左衛門 |
| (E) 清少納言 | (F) 松尾芭蕉 | (G) 鴨長明 | |
| ア 源氏物語 | イ 好色一代男 | ウ 南総里見八犬伝 | エ 曾根崎心中 |
| オ 徒然草 | カ 奥の細道 | キ 枕草子 | ク 方丈記 |

〈このページは白紙です。〉

二

次の文章は、森絵都の小説「子供は眠る」の一節である。「ぼく」、「智明」、「ナス」の中学生三人と「ナス」の弟で小学生の「じゃがまる」、この四人は今年も「章くん」の家の別荘へ「宿題に取り組むため」という名目で集まった。招待主で最年長の「章くん」を入れて五人、皆いと同じ士だ。いつも遠く離ればなれの「ぼくら」はそれぞれの親元を離れて子供だけ（給仕の「小野寺さん」は除く）で過ごすこの合宿をとて大切にしていた。

以下はそれに続く小説の本文である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「五年前、最初にここに来たときのこと、おぼえてる？」

船虫の影を目で追いながら、智明がぼそと切りだした。

「五年前？」

「うん。なんかもう大昔みたいだよな」

「だよなあ」

当時の記憶はあいまいだった。だって、ぼくはまだ小学三年生だったから。じゃがまるは小さすぎて連れてきてもらえなかった。そんな時代だ。

「あのときさ、正樹くんって子も来てたじゃない」

「ああ、うん……」

「ほらあの、章くんとしょっちゅうけんかしてた子」

「うん、うん」

思いだした。

正樹くんは章くんの父さん方の親戚。ぼくらとはその夏が初対面だった。気ままというかわがままというか、とにかくマイペー

スな男の子で、みんなが勉強していてもひとりで遊んでたし、もちろんクラシック鑑賞なんてつきあわずに、さつさと部屋へ引きあげていった。ぼくは①うらやましかつたけど、章くんはいつもかりかりしていたっけ。

「正樹くんがここに来たの、あの夏が最初で最後だったよな」

智明の声が重く響いた。

「つぎの年からは、もういなかった」

「うん」

「なんでだと思う？」

ぼくには返事ができなかった。

「四年前はさ、貴ちゃんも一回、来たじゃない」

「ああ、貴ちゃんね」

貴ちゃんのことによくおぼえている。スーパーマンみたいな小学生だったから。

「すごい子だったよね。勉強できるし、スポーツも得意だし、掃除なんかもささっとやっちゃってさ。小野寺さんにも、料理の筋がいい、なんて言われちゃって。何やったってみんなの一番で、体も章くんよりでかいから、ぼくらと同一年なのに、なんか一番年上みたいでさ……」

そこまでべらべらしゃべってから、ぼくはたと口をつぐんだ。その貴ちゃんもつぎの夏には、ぼくらの前から消えていたんだ。

「また会おうね」って約束して、にこにこ手をふって帰っていったのに。

「つまり、そういうことだ」

智明が言った。

「章くんに逆らったり、章くんよりデキるところを見せたりしたら、もうここには呼ばれなくなる」

脳天にがつんと来た。

ぼくは一瞬、どうすればいいのかわからなくなって、とつさに海へ目をやった。暗い暗い夜の海。遠い岸辺に灯台の光が見える。その光がぐるりとひとまわりしても、ぼくにはまだどうすればいいのかわからなかった。

「じゃあぼく、どうすればいいのかな」

情けないけど、ぼくは智明に訊いてみた。

「今までどおりにしてればいいんだよ。章くんの言うことをきいて、章くんより目立たないようにして」

「章くんの言うことがいやになっても？」

「いやな顔なんて見せるなよ。隠すんだ。隠しとおすんだ」

「できるかな」

「おれは去年からそうしてたよ」

ぼくはおどろいて智明にむきなおった。

智明は苦しい笑顔をこしらえて、

「だっておれ、今年もここに来たかったから。おまえや、ナスや、じゃがまるとさ、また一緒に遊びたいじゃん。そうでなきゃなんか、夏って感じ、しないもんなあ」

たしかにそうだった。

この別荘で過ごす二週間の夏。それはぼくらにとって本当に貴重なものなんだ。みんなが勢揃いして遊べるのなんて、この機会を逃すと、ほかにない。やかましい家族から離れて、ぼくらだけの世界にひたれるこの大事な夏を、ぼくは絶対になくしたくなかった。

(中略)

「王様は裸だ」とさけんだのは、小さな子供だった。賢い人にだけ見えると言われて、ありもしない服を身にまとい、大手をふって街を歩いていた裸の王様。王様はそのとき、どんな気がしただろう？ 憎いのは小さな子供じゃない。それまで王様をだまして偽物のおせじをふりまいていた連中だったと思う。

章くんは王様ほどばかじゃなかったけど、ぼくらの嘘をあばいたのは、やっぱり小さなじゃがまるだった。別れの前日。

この夏の終了まで、あとわずか二十時間。

ようやくそこまでこぎつけたときになって、じゃがまるはすべてをひっくりかえしてしまったんだ。

(中略)

「兄ちゃん、何してんだよ」

テーブルからじゃがまるが不満げな声を響かせた。

「へんな発音しないでよ。兄ちゃん、もつとうまいじゃんか。へんな読み方すると癖になるって、ミスター・エリオットが言ってたよ」

A、とはまさにこのことだろう。ナスは見るからにドウヨウして耳まで赤らめ、ぼくと智明もこまっとうつむいた。やばい。こいつはやばいぞ。

「どういことだ？」

章くんがナスにつめよると、

「兄ちゃん、ミスター・エリオットに英語習ってたんだよ、六年間も」

ナスの代わりに、じゃがまるが答えた。

「ほくも今、通ってんだ。まだ兄ちゃんには負けるけどね」

このとき章くんがどんな顔をしていたのか、ほくは知らない。のぞきこむ勇気なんてとてもなかったから。ほくらは気まずくだまりこんだ。

章くんの沈黙が不気味だった。

異様な緊張感がリビングに立ちこめる。そのびりびりした空気の意味がわからず、じゃがまるは混乱して立ちあがった。

「どうしたの？ みんな」

だれも答えを返さない。

「ねえ、どうしたの？ どうしちゃったの？」

じゃがまるの声が泣き声に近づいていく。

どうしたの、どうしたの、と、じゃがまるは必死でくりかえし、たまりかねたナスが「なんでもないよ」とつぶやくと、

「ちがうよっ」

バシッと、ほくの肩に何かが当たった。

「なんでもないよ。ぜんぜん、なんでもないじゃんかっ」

ふりむくと、真っ赤な顔のじゃがまるが両手に貝殻を握りしめている。口もとをぶるぶると震わせて、完全にべそをかきながら、じゃがまるはほくらにバシバシと貝殻を投げつけた。

②「みんなへんだよ。おかしいよ。この夏はなんだか、どうかしてるよ。兄ちゃんも恭くんも智明くんも、みんなへんなんた

ちゃったよ。ぜんぜんちがくなっちゃったよ。ちがくないのは、章くんだけだよ。こんなのいやだ、いやだ、いやだっ」

瞬く間にすべての貝殻をぶちまけると、

「もとにもどしてよっ」

一言、絶叫して、じゃがまるはリビングを飛びだしていった。

バシヤン。じゃがまるの叩きつけた扉がうなり声をあげる。

ほくらはみんな、あっけにとられていた。

いったい何が起こったんだ？

うつろな頭で考えながら、ほくは床に散った貝殻をながめまわした。

まっぶたつに割れた貝殻。

こなごなに砕けた貝殻。

ほくの足下でまだ震えているちっぽけなかけら――。

何かとりかえしのつかないことが起こったんだと、ほくはようやく気がついた。

「どっちみち、これで最後なんだ」

最初に口を開いたのは、章くんだった。

ほくらは章くんに注目した。

「最後って？」

組んだ両手にあごをのせ、章くんは③「どこか一点を涼しげな瞳で見すえている。

「おれはさ、来年はもう高校生だ。いいかげんおまえらと遊んでるような年でもないだろ。今だって、これでもいちおう受験生だぜ」

「だからなんなの？」

ぼくがうわずった声をあげると、章くんはふつと苦笑いをして、

「だからさ、おれがここに来るのは、今年で最後ってこと。どうだおまえら、うれしいだろ？」

シャレにならなかった。

ぼくらは打ちのめされた。うれしいどころか、こてんぱんにやられた。

だって章くんがいなさや、ぼくらの夏は始まらないんだ。

その証拠に、

「ばか、そんな顔すんな。おまえらがまた来たいんなら、いいよ、勝手に使えよ。おれから親父に頼んどくから」

章くんがそう言ったとき、申しあわせたわけでもないのに、ぼくらはいつせいに

B

いた。

この別荘は章くんのものだ。おじさんなんて、関係ない。

章くんは意外そうにぼくらをながめ、「そうか」と、低くつぶやくと、強引にこの話を打ちきるようにして腰を浮かした。

「じゃ、おれはちよつとじゃがまる見てくつから。おまえら、先に昼飯の**仕度**でもしてろ」

章くんは急ぎ足で玄関をめざし、ぼくらは音のないリビングに取り残された。

この夏のどこかに、永遠に、取りのこされた気がした。

ぼくらの夏が今年で終わる。完全に終わる。

そしてもう二度と、始まらない。

小野寺さんの料理をダイニングに運ぶあいだも、その皿をテーブルに並べるあいだも、ぼくらは一様にだまりがちで、動きもど
こかきこちなかった。あの(c)キヨウな智明が花瓶を倒した。ナスはみそ汁の椀にごはんをよそった。ぼくはみんなで食べるニラ

炒めの皿にソースをかけてしまった。めちゃくちゃだ。

ぼくも、智明も、ナスも。だれもが似たようなショックと、そして似たような(4)後ろめたさを感じていたのだと思う。

そんなぼくらに比べたら、かえってじゃがまるのほうが冷静だった。

十二時を少しまわったころ、章くんと一緒にもどって来たじゃがまるは、赤い目をしながらも精一杯、中学年としての威厳を示
してくれた。

「さつきはちよつと、(5)おとなげなかったよ」

ぽつりと言って、テーブルの椅子に腰かける。

「あのこと、聞いた？」

ナスが尋ねると、

「うん。でも、ぼく、もういいんだ」

両足をぶらぶら揺さぶりながら、じゃがまるはもう何もかもあきらめきったような口ぶりで、

「でもさ、そういうことだったら、もっと早く言ってくればよかったのに」

それにはぼくも同感だった。

章くんはどうしてだまってたんだろう？

こんな大事なことを、なんだって今まで隠してたんだ？

ぼくは問いかけるように章くんを見た。章くんはぼくがソースをかけたニラ炒めを噛みしめているところだった。ぼくの視線に
気づくと、たちまちけわしい目つきになって、

「あのな、恭」

ぼくはびくんと身を引いた。けれど章くんの口から出てきたのは、ぼくの恐れていたソースの話題じゃなかった。

「午後、また競泳するぞ」

みんなで勝負する競泳なのに、章くんはぼくだけを見つめて、言ったんだ。

「これが最後の勝負だ。がんばれよ」

(中略)

わざと負けるなんて、もういやだ。「がんばれよ」とはっぱをかけられたとき、ぼくは章くんの目を^(d)セイシでできなかった。あんなやましさはたくさんだ。

ラスト百メートルの地点で、ぼくはスパートをかけた。うまく波に乗って体を押し出す。ありったけの力をこめて海をかきわけ

る。
気がつくと、ぼくは断トツの一位で陸の上にいた。

力を出しきった爽快感と、同じくらいの脱力感。

砂浜で呼吸を整えていると、数十秒遅れでゴールした章くんが疲れた足どりで歩みよってきた。すうっと右手をさしだしたので、反射的にぼくも右手を出すと、その手をパシャリとやられ、おまけに^⑥ほおをつねられた。

「いて」

ぼくが顔をしかめると、章くんは愉快そうにからからと笑い、そのまま別荘へ引きあげていった。
やせっぽちの後ろ姿が、^{しんまろう}蟹気楼のむこうにかすんでいく。

^⑦ぼくはその場にへたりこみ、大の字になってまぶたを閉じた。

潮と魚とこんぶのにおい。

大きく息を吸いこむと、胸がつまって、苦しくなった。

章くんにつねられたほおがじんじんしていた。

問一 〓 (a) 〓 (d) のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二

A

 ・

B

 に当てはまる語句をそれぞれ選びなさい。

- | | | | |
|---|----------|---|-----------|
| A | ア 時が凍りつく | B | ア めをおよがせて |
| イ | 時が刻まれる | イ | あたまをさげて |
| ウ | 時が加速する | ウ | てをこまねいて |
| エ | 時がねじれる | エ | かぶりをふって |

問三 ①「うらやましかった」とあるが、だれのどのようなところをうらやましいと思ったのか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア 正樹君の、周囲に気をつかわず自由に振る舞うことができるところ。
イ 章君の、自分の音楽の趣味を周囲に押しつけることができるところ。
ウ 章君の、何事もマイペースで周囲を振り回すことができるところ。
エ 正樹君の、自信に満ちた態度で自分の意志を通すことができるところ。

問四 ― ②「みんなへんだよ。おかしいよ」とあるが、「みんな」が「へん」になってしまった理由を説明しなさい。

問五 ― ③「どこか一点を涼しげな瞳で見すえている」とあるが、このときの章くんの心情の説明として、最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 周囲から自分が敬遠されていることに気づかないふりをしていたのに、今回その関係が崩れてしまったことをさびしく感じている。

イ せっかく「みんな」のためにと合宿を実施してきたのに、恩を仇^{あだ}で返される形になって一緒に楽しむ気分ではなくなっている。

ウ 合宿を続けるかどうか悩んでいたが、今回自分をだましていた「みんな」へ仕返しをするため合宿自体をやめることを冷静に考えている。

エ 周囲から自分が氣をつかれていたという事実について考えているとともに、合宿の終わりを意識する中でさびしさを感じている。

問六 ― ④「後ろめたさ」とあるが、ここで「後ろめたさ」を感じた理由を説明しなさい。

問七 ― ⑤「おとなげなかったよ」とあるが、どのような行動をとったことを「おとなげなかった」と言っているのか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 自分の感情に流されてものや「ぼくら」にあたってわめいたこと。

イ 独りよがりの考えにこだわって「ぼくら」を怒らせてしまったこと。

ウ 「章くん」のことだけ考え、みんなの立場や都合は考えなかったこと。

エ 「ぼくら」に真実を告げることだけが正しいのだと思い込んでいたこと。

問八 ― ⑥「ほおをつねられた」とあるが、「章くん」のこの「ほおをつねる」という行動を説明したものとして、最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア ほおをつねることによって、今までだまされ続けてきたことで自分の内側にたまったうらみをはらしたかった。

イ ほおをつねることによって、悔しさを示しつつ今までだまされてきたことを水に流す気持ちを表現したかった。

ウ ほおをつねることによって、合宿に参加した「みんな」と自分との上下関係をはっきりさせようとした。

エ ほおをつねることによって、今回の合宿で自ら味わった痛みを「ぼく」にも感じさせようとした。

問九 ― ⑦「ぼくはその場にへたりこみ、大の字になってまぶたを閉じた」について説明したものとして、**適当でないもの**を、次の中から二つ選びなさい。

ア 今まで力をだせなかった自分のふがいなさを振り返り、今回は「章くん」に勝つため力のすべてを出し切ったのだという満足感をかみしめている。

イ 全力を尽くした後の苦しさに目を閉じて耐えながら、「章くん」の機嫌を損ねたのではないかという不安が大きくなり、後悔している。

ウ 正々堂々と競いきつた満足感とともに、「章くん」との関係を少しは改善できたと思い、安らかな気持ちを感じている。エ 去って行く「章くん」の後ろ姿を見て、彼と過ごす夏休みがこれでおわってしまうことを実感しさびしさを感じている。

オ 「章くん」にも原因があったとはいえ、自分たちの打算的な行動が彼を傷つけたことに、心を痛めている。

解答は、**はい、いいえ**に書くこと。
記号や句読点も一字に数えること。
記述は解答欄内に収めること。一行の欄に
二行以上書いた場合は無効とする。
※欄には記入しないこと。

受験番号		
氏名		
※		

—

問一
a
b
c
d

問二

問三

問四

※

問五

問六

人物

代表作

※

二

問一
a
b
c
d

問二
A
B

問三

問四

問五

※

問六

問七

問八

問九

※